李宗詩解 改正月令博物纂 三秋部 四

529
12

三秋部目録

三秋の分へ△印あるハ前ようく俳の季ハ用ゐ物へ

時令 此部ハ時候ハかくなるとと出をそ年〜ろいと七月又八月ハも用ゐ

△秋風 秋初一丁
△秋雨 秋二丁
秋雲 秋三丁
△秋霞 秋三丁
△秋虹 秋三丁
△露 △白露 △うハつゆ △玉の玉
△袖のつゆ 秋三丁
△露 △きりの海 △きりの香 △露の籠
△きりのふづく △きり舟 下道 秋五丁
△川きり △きり雨 △きり玉 人
△秋日 秋七丁
△月 △盃のいろ
△月 △盃のげ
△さゝら月 秋七丁 △月の桂 △姮娥 秋八丁
△月の霜 △月の都 △月の紅
△月の雪 秋九丁 △心の月 秋十丁
△月の水 △真如の月 △脳の月
△不見月 秋十丁
△新月 秋十一丁
△弦月 △弓月 △弦月 △のゆり月
三日月 秋十二丁
△ふなうり月 秋十二丁
△上弦 △下弦
望月 秋十三丁
不知夜月 秋十三丁
立待月 △十七日夜月 秋十三丁

5
529

△居待月　△十八夜月　秋十三丁
△伏待月　△寝待月　秋十四丁
△更待月　△九日月　秋十四丁　△皆亥申　秋十四丁
△十三夜月　△夜ま月　秋十四丁
△有明月　秋十四丁
△待月　秋十四丁
△残月　秋十五丁
△照月次　秋十五丁
△星月夜　秋十五丁
△身入　秋十五丁
△秋の聲　秋十五丁
△秋野　秋十六丁
△秋山　秋十六丁
△秋水　秋十七丁
△秋夕　秋十七丁
△秋夜　秋十五丁
△秋宮　秋十五丁
△千秋樂　秋十六丁
△龍田姫　秋十五丁
△律の調　秋十五丁
△鶉衣　秋十六丁
△田の庵　秋十六丁
△小田守　秋十六丁
△窯山子　△鹿驚　△澁水
△鳥おどし　秋十六丁　△添水　△雉　△鳴子
△板　△ゐる　秋十七丁　△焼鳥　秋十七丁

混雑

此部ハ日令時令草木ゑゞ品と出さ

草木

此部ハ三秋ふうそうを草木をいぐさ

△萩　秋十八丁
△柾　△柾ゑ　秋　△柾集　秋十八丁
△薄　△志のゝ　△一りゝ薄　秋十八丁
△糸薄　秋十九丁
△葛葉　△葛ゑ　秋　△葛ゝ　秋十九丁
△蔦　秋十丁
△忍草　秋十丁
△景天草　秋十丁
△芭蕉　秋十丁
△鶏頭花　秋十丁
△草花　△二穂の花　秋　△百州の花　秋十丁
△白茅　△茅萱　秋十丁
△雁来紅　秋十丁
△角觝草　秋十丁
△萱刈　△萱ゝ　秋十丁　△萱のさ
△萩殿　△萩の戸　秋十四丁
△犬子草　秋十丁
△鬼灯　秋十五丁
△花壇　△花畠　秋十五丁
△若烟草　秋十五丁
△新番椒　秋十五丁
△薑　△新しき姜　秋十六丁
△布瓜　秋十五丁
△羊　秋十六丁
△牛房引　秋十六丁

△頭の芋 秋 廿六丁
△零餘子 秋 廿七丁
△泉
△さゝ一物 △ほくそかそ
△拂 ほき くさ ひもち
△梨子 △水ゝ一 △青色 △木色 △山梨 秋 廿八丁
△辺江色 △生潮色 △秋の青色
△秋田 △田の色 △稲 △富草の花 秋 廿九丁
△稲 舟 △稲かり
△落穂 秋 卅丁
△稲子 秋 卅丁
△稲扱 秋 卅丁
△新米 △とし米 秋 卅丁
△青米
△稲干 秋 卅丁
△稲扞 秋 卅丁
△綿取 △お綿 秋 卅丁
△挑灰 秋 卅丁
△薯蕷 秋 廿六丁
△耳諸 秋 廿七丁
△柳 ○柳の種類 秋 廿八丁

秋生類

この部ハ三秋ふるゝ生るいろいろ

△鹿 △麁 △麋 △麻笛 △麻垣 秋 卅丁
△麻の声
△鵙早贄 △鵙の贄 秋 卅三丁
△鵙おとし △見せ猟 秋 卅三丁
△鵙田 秋 卅三丁
△鳴 △暁の鳴 △百鳴き △うぐひす 秋 卅三丁
△ゝ〜〜き △かりゝ〜き
△鶉 △片うづら △かけうづら △鶉籠 秋 卅四丁
△ゝうゝ個 △ゝうゝの床
△鱸 秋 卅五丁
△鮠 秋 卅五丁
△江鮒 △小濃 秋 卅六丁
△鮒走 卅六丁
△鰯 △九万疋 秋 卅六丁
△鰯引 秋 卅六丁
△鰯雲 秋 卅六丁
鰻簗 秋 卅六丁

三秋目録終

○五節句祝譯

一五節句ゝて祝ふ事いづれも陽月ゝれば陽ゝ生成の道にして陰ゝ肅殺の謂ゝ陽の数ゝ一三五七九の奇数ゝ陰の数ゝ二四六

八十の偶数なるゆへ故ふ陽と扶
け陰と抑へる術ふ陽月陽日
ふ食する物こそ陽物を食し
て陽と旺ふ陽を扶く先春
餅草餅粽索餅栗等の物
を供御ふ献ずこれなり故ふ
節供くゝ江家次第ふ委く
見えたり正月ハ七日とりて
節供の初めとす清少納言
の枕草子にも粥の節供黍
なくゝるも此事なりと
ゝ正五九月を三長月と
定られたるハ仁明帝の御字
承和三年の詔とや

秋之部

三秋の名ハ何なるものか
秋の名ハ何なるものか

時令

此部ハ時候ハ何なるものか
ハ七月ハ八月九月

秋風　秋の風ハ何なるものか
のなりなるもの
そそくるもくれもよめり

俊定

秋　後拾遺
ながるるもの遠のなかきちよをくゝる
をえ長をとうけく秋ぞそうく

拾遺愚　秋風蕩野　西家
ゝ霧もゝ茅の武蔵野
吹ゝ秋の野ゝ

新後撰　閑居秋風　秋風一条入内百
人目ハ荻宿れ荻ゝをつゝて
秋ゝは風のはく

詞　萩の葉萩の下葉。播の葉。田の
面。海茅生。ナヒ。ひき。篠原。小菅。
るゝよ。ハの秋風。新後撰の松。紅葉。蓍
も色づ。門田の稲葉。萩のまゝ。

連 秋風のきのふは何ぞ紀巴
俳 秋風や雀の竹の事にあん 閑女
狂 夕ぐれが門のやうまでをつれて
ひのくまもるあに秋風ぞひく 自曲

詩 秋風五字對句

山樹含斜日 晩風連殺氣
ヤマノヒユモクニ ユフヒノカゲフクミ ニラカゼガフケハモノ スゴヒケレキニナリ

池風澄早涼 新月照邊秋
イケノカゼガハヤクスガシイケレキヲミスル ミカツキガヘンドノアキゲレキヲミセル

詩 秋風七字對句

秋風江上清無際 白雲飛
アキカゼガ江ノウヘニフケバナミガハテシナフタツ シラクモガハヤウユク

暮雨舟中酒一樽 風滿樓
クレカタノアメガモノサビシイユヘフネノ中デサケヲリトモノニまぶまフ カゼガニカヒヲフキヌク

詩 秋風詞 杜牧

琪樹西風秋簟秋 西カゼカスクト
ヘ

愚ハ子サイノ心ガ秋メイテキカ 楚雲湘水懐同遊

ソレニツケテモ雲夢沢ヤ湘水ト云所ノアンジタカシアンジタ人ノコトヲ思ヒヤラレタ 高歌一曲掩明鏡 ナドヲ謂フ 遠ノ方ヲ眺ル 昨日少年今白頭 キノフノカイトヒカイケフノシラガ 酔トナツタトオモフ

秋雨 ノ心

黄雨さくさくしたるものをんしと
日を見ぬ時中ぬ心もとろ村
雨つゝの夜の明ゆ〜ぬ心をとりつ

秋 夫木

秋風のそよ〜ひく〜る村さめを
ふるくまよ〜て月ふ〜しぞ哀

千首 秋雨打窓 師兼

小夜ふけき屋の窓のまをまて
ふるこゑ〜ふりそ〜人秋のむ〜さめ

詞 和歌と湾る。笑ふ。絶〜
秋よたてゞる。村雨をくぐ。
をくぐ。秋のむ〜さめ。桂の葉。

連 ふるとても秋ぞそゆへ窓の雨 宗祇

俳 ものゝ〜ゆ〜ゆ〜窓の雨 丁固
夕法度の苦うんぐ〜秋の雨 湖南

(狂) あゝ毎とゝややぞろの村雨へ
さがも稲田もいそがしくなる常蓑

(詩) 五字對句　同上

晴山疎雨・後　白雲當嶺・雨
ハレタル山ニサツト雨ノ多ク　シラクモガムカフノミネニカヽツテアメガフル

秋樹斷雲・中　黄葉遠階・風
アキノビユ木カタヘ〳〵ノ中ニミエル　キバンタ木ノハガチツテ庭ノフミタヘヲ見ト風カフク

(詩) 七字對句　詩

九曲暮雲・連雁宕　秋風飛
イクエモ立コメタ日クレノ雲ガ　アキカゼカタカクフク
雁宕山ト云フ山ニエツバク

片帆秋雨・落錢塘　帶雨秋
ヘンハンノフネウ　ヲツセンタウニ　ヲビルアメアキ
ヒトツノホカケ舟ガ秋雨ノフル日　アメニアフテー
錢塘江トイフエニフナガリスル　秋ガヒキカ潮ヒ

秋霞　朝夕のきりぎりす　秋雲

△朝夕のさゝんたうるうつゝいく日和よし
○朝夕雲のやけるは雨やけと
い〻二三日のうちは雨よなる。然
やけ西あゝくてゆゝまれば晴

日和よう〳〵霞の少春　秋工朝の
の十六丁めは秋雲〳〵　東牧

西は月色三日の内は雨ふる。雲の
中ハ赤ニあゝて晴天ちかし

○朝夕よりも夕牧のまちをぐは
ちうく立てばふるなり

秋雲　何雲東南のうより
△出くる時きて
出しが去るよりこの風ハせ
うちうちの山○西方より東へ行ハ
西南西ハ小雨ふる日和よう。黑雲
天河とふるけば風雨あるなり

(秋) さゞむしはあるしそこる今よりの
綾のをゞさや雲とたゝうん基個

露　△白露　玉露
△秋のつゆ　△つゆけき

(異名) 陰濕　玉露　玉潤　白露
露の名はいろ〳〵ある秋の初ハ九月時令
の名に露しく　ちうちうの白露
い物さをちうたる　八月ちうの時

芝のとの紐のうへとふをたゞ
露の玉こは玉はたゞそこを紐の
露は紐をたるをも紐のまゝ
こゝをもこつゝ西方の露のをたさ
るしくりのくもりたるもつ
て為よりもゆるもばかり
。濁濁を濁濁のこうこうあ
ぶらこいてこゝとあり玉露玉
潤こゝもこたまのおこれかこち
こ月こそこいつゝたり

秋 建仁歌合 寂蓮

時雨つゝゆふ日のいろう紐さきて
ふるもさむきあくのむら露

千五百番歌合 通具

おどしはるけさは封雲かもゆく
入日うこがくこゝれもはる西

真應百首 濱茅露 為家

刈けばかつ下もとれるる濡ぢ人の
えもとゝ露につくくはる西のあこ玉

夫木 名所露 僧正行丞

宮撰歌合 小萩 為家

えの露はる露こゝやこゝ月こ夢
後拾遺 朝露 親房

こゝよい来つる秋の露こ我ぬこ
移りやしぬこゝれ花こゝ

千首 芝露 為尹

秋はこゝ見る萩の袖こゝ
一りこゝくこゝる秋のこゝ

家集 露秋夜 法眼

露田服をけるものこゝ
ものこゝゆる露のこゝ玉

詞 結ぶ。おくき。ふるき。ふつ。月中。こつ。萩。こゝ。露のこゝに。露の萩。萩の上露。萩の下露。菊。ゆれこゝ菊。露の下源。こゝ露。小萩の露。芝の露。芝の露。くもど。露のこゝ。

朝良 えろのきうすなでしこ うたさく

萩 をれの玉風 よもぎ よもぎ まとちろかう の佐ゆ

ゑぶ草 秋の玉のぶ よなく露 女郎花 女のうの 名は酒と

たえんう 淺茅 佐ゆをあらうみよ めり行きぢが袖よとく露

古郷 露の玉のさしおさおが佐ゆよも ぎよのつゆまへ行きむ一夜のは

つゆふりき 庭 行んう庭よへおさちが よしよかう 庭ろくろ人ほしと露

まけまぶのくるよもぎ よのつゆちりけしくる 尾花 秋の露 うのん

たてふ 秋の露洞ともつてらみよみりその う 意外 葛が葉れそく之露でうう

とてりろきみふみたさん玉のひてるる そのゑくぎを秋の玉のべの佐ゆ、

なぎらんまくるは佐ゆのうらのきえんや らぬみひをくるらち袖ささんくりりの

むみ 無常 見ろくろうちんよろき露と くも

どろき葉のえらよもきおの 世なを 露よみきん人をうひたづし世の露よ なさ人のえもうけのころるも

狂 誰が つろゝろさぼじめそみせうを 光りけまゆきむれろう露 常樂養

連 露踏ハぞ行秋のかりて獵矢ぶる 紹巴

詩 露七字對句　詩礎

直望明河臨象闕 ● 露未乾

タヾノゾミアマノカハラミレバ禁裏ノ御門ヘサシカヽツテアルヤウナ ツユカニタ カハカヌ

誰霑零露捧金盤 ● 雨露清

ターカ天上ノ露ヲ金盤ニウケテ天子ヘサヽグルゾ フツタツユカキヨイ

光浮月彩華明徹曙 ● 玉露秋

ヒカリハ月ノ色ヲウカヘテアキラカニアケテアル ツユノヒカリガ月ノ色ヲウカヘテ タマノヤウニツユノヲク秋ジヤ

氣晴天宇暗生寒 ● 白露偏

ツユノキガオホゾラニキヨクハレテドコトモナシニサムサガオボエル シラツユガカクベツアカイ

詩 五字對句　同上

桂香多露裏 ● 夕陽飄白露

カツラノ木ガカホレバツユガツヽンデアル ユフ日カゲニシラツユガヒルガヘリ

石響細泉廻 ● 樹影拂青苔

イシニヒヾクサイセンノメグル イヅミノメグルニ ジユモクノカゲアヲイコケヲハラフ

露 故事

つゆのこと

陰陽氣勝（インヤウキカツ）

陽氣勝ツトキハ散ジテ雨トナリ露トナル 陰氣勝テバ凝テ雪トナリ霜ト成ルナリ

金莖　漢武帝承露盤トテ銅ニテ高サ二十丈ニ作リ建
章宮ニテ一夜天ノ甘露ヲ美テ王
屑ニ和シテ飲タリトアリ

霧

△きりの海△きりの番△雾
のまがき△きりみちぐく
△きりの下△川きり△きり雨
△きり立人。立い雾△降い雾也
天氣ヨリ地氣せさる成雾と云
霧して氣ぜさるを雾と云皆
雾の霧ど△りのよう秋ハてりう
雾ハ雨の本ハ拂う△きりの色い
物をなぞそ雾をらん△雾の海
ぬ△△ら海のぞく△ちる紙ス△きり
の番い雾又番あり△きり立い
なぞそ△ら人をら△雾の雫ま
きりれ立ら後に物のぬるるを
ら人△雾の下ハきりの立ら
下の雾を彩る △川きりい
川又立ら雾ハ△きり雨い
小雨ハ△ら△雾をら人ら

夜霧

夜霧百首　秋会
霧をハ何まのとやまれ夕ぐれ
雾のまがきをあらんとるる

建長百首　光俊

朝日さし方のむら雾ハ山中で
ふはく立ら秋の郭

土木　雾中紅葉　西行

錦ちる秋の木ぞえとうせぬ武
蔵ぶつる三りみ園をはらて

建保百首　家隆

須ものうしに秋中くたさの初雁の
々ちりて三りの名ハ雾ら
詞なぞ△たつ。こもる。嶽雾
八重八重雾ハ八重。立ら。ちる　ちる
立速△立のぶる。三り立ム。きりの
ちえつる。雾又消紛ちうき立雾。
きり村まりひ。雾又ハ人れる。ひ
雾。雾のきり。山中ケ△き。砂石

の浦　朝日山。入相のうの雲さん。
きりさめ。秋の旅人　日新　日新しく
りの日新孫〜〜　このそれ日新さ
まづむ。月日　風　風さんし紛の風う
さでようん。さこもり。極楽さるびく。
尾上さうひく　霧源き谷。海波のうき
霧の山離　ミのまげたまさる　川　紛風
のまい〜ててこもさせてもえく　の
の雲のうちえゆく　俗えこと　紛
紛舟　ねぐらの雲　えどよせく　雁　そこらく　雲の
中うつまくん

連　風いづ朝雲ろし　周の松　寄帆
俳　霄園や雲ゆうきの　嶺　流沼　其角

狂　雄長老
和きりや相のまうたの挿の本と
ととう紛人まろぬまえ〜〜く

詩　霧詞　伏姫

水霧　雑山烟　水上ノキリガ山カラ立
夏々　不見天　ホノ多ニシテソラモ
聽猿　方寸曲　サルノコエヲキイテハ十ニノタリデ白アトスイレタ

開瀬　始知川　瀬ノ水ヲトヲキイテハジメテ川トスコタシル
漁人惑澳浦　リヤシヒハオキ尼ウラ尼ミワケス
行舟迷沂沿　サンドウハフ子ノボリサガリニヨフ
日中気霧　蘭盡　ヒルゴロニカノキリガハレテシマタレバ
空水共澄鮮　ソラモミヅモイツシヨニスミワタッテ見エタ

秋月　凄日　紛〜色と西漢〜〜秋の日の日
秋のうらさみともうくく後ろく著や
ときをもよむべ〜〜とかう

歌　秋の月のうくくたのみ〜と紛び
まぐ濃あの人代神のまく〜霧　花京

俳　秋の月や美らしもさぬ長穆　雪光

狂　今うく秋とろ海生のうんぞ〜も
干ひ〜〜ぬ秋の日〜は　たりそり　奥樹

月　月の大法の穂人　唯南さ出くう
霧のうび尼の先くさやけ

きり月月月さや　月　和名　月
すく男　八重　ぞくく人抑くこ月〜〜き

みゝ〜 [illegible]
ら異 [illegible]
(異名) 嫦娥 [illegible] 丹丹六古事御覽
赤蟾 玄兎 因樹活注 玉兎 酉陽雜俎
蟾蜍 五經通義 金波 [illegible]
嗜精 [illegible] 金隗 [illegible] 銀盤
[illegible] 氷鏡 [illegible] 望舒 [illegible] 夜光 [illegible]
氷氣 [illegible]
月を見るべし月の [illegible]
[illegible] 月の [illegible]
霜人と [illegible]
秋 [illegible]
[illegible] 月いよ〜
明らけ〜よみ〜 [illegible]
逆 [illegible]
七月の後九月の [illegible]
中 [illegible]
[illegible] 月の [illegible]
八月の [illegible]
[illegible]

○上弦下弦 月の [illegible]
[illegible] 物 [illegible]
○年朝 [illegible]
[illegible]
[illegible] 河の [illegible]
[illegible]
[illegible]

故事 月桂 酉陽雜俎二曰 月ノ中ニ桂ノ樹アリ高サ五百丈其木ヲ斧ヲ以テ伐人アリツノ名ヲ吳剛ト云フ常ニ伐ルニ斧ノアト伐ルニ隨ツテイエテツイニ伐リツクスコトヲエズト云ヘリ依テ。カツラ男。カツラノ花ヽタハ。カツラノ モミヂヌハ。カツラノカゲナヒヽ イエルヨシナリ

(秋) 久りこれ月のろ〜〜も秋来れば [illegible] 忠岑

連 露さやかに月の桂の花やちる 昌叱

俳 堂塞に月のかつらの花咲あり 許六

嫦娥 郭ト云フ人不老不死ノクスリヲ西王母ニ請テ得タルニ羿カ妻ノ嫦娥ヌスミ服シテ月ノ中ニ奔リノボリタリト云フ故事ナリ事文類聚ニ出ヨツテ月ノ異名ヲ嫦娥ト云ヘリ

月都 紀世繼ノ日月天の宮殿縦横後ニ考ヘシ 十九

由良あり月面の坂臘八七宝ふて
はるばるとうとうとこれ月のこやこの
故郷乃山不ありう

秋夫木 為家

月は光りの郭の光りの郭に月ぞ
むかの遠うり月ぞ

俳 うりうり月の郭の郭の郭の郭花 真室
月もみのうぢうぢ郭の郭の郭 巴綾

月鼠 譬喩經ニ曰虎ニ逐レタル人野中ノ井ニ落入ニト

シテ草ニトリツキタルニ黒キ鼠ト白キ鼠ト有テカノ草ノ根ヲ齧カノ黒キ鼠ハ月ニ白キ鼠ハ日ニコレ月日ノ早クタツタトヘテリ月ノ鼠ト云事此經説ヨリ起レリ

秋 我ひのむ夢は根とこむ嵐そと
ふへハ月のうらめしきる 後撰

俳 月の嵐ふかし蓋に翠ぶ 惟然

月の雷 月の地ヨ姫ガ和
似ふるをらく

秋 秋さむしふけ行ふるもひきて
月ひさぬ〜霜と見えなり 冨件

俳 ちりそとば月の雷秋 本枝
狂 表思ふ賀繚勝もけるぞうし
月のひうりはまつちろ雷 令紋

詩 李白 牀前看月光ユカノヘ月ノ光ヲミレバ
疑是地上霜ア一リニ疑ヘ地ニ
舉頭望山月一山ノハノ月ヲ
低頭思故郷ノコトヲオモヒ出ス

月の雪

月の光白くしく雪と似るとよめる

月の霜とはしらのたとへ

秋 雪なりがたるとも物とも見えず秋の月かな　三玉

俳 そらくとんとの月の雪こそ　如泉

狂 長ろろの月の影はなさうして どこまでゆきの深くまく　真海

月は氷

月のひかり氷のごとをいへ

秋 月きよく都の秋を見るせば 氷をしくかな　後成

真如月

真如とは物の妄執なき如との月雲なかりて

一切の妄想の濁りぬと真如の月をいへり

秋 夫本

むかし 妄執も月もさやかなり 紅陵

心月

真如の月を指すなり 清き心をいへり

秋 ちぢまるろの月はうくかは 迫のしらさて地かなるやせん　信貫

胸月

心月とおなじ心の清きをむねとなすよむゆへなり

俳 長ぐ小胸の月秋の月 野坡

歌なりして砥石胸の月足る　如行

不見月

月を深せーなり

狂 いろんぐ小雨の雲はふるんきく 紅てある月のろうりが邪　景天

詩 七字對句　詩礎

四野霧凝空寂寞　空對酒

野ニ出テ四方ヲミレバ月ノナイ　ムナシウ酒ヲノムバカリジヤ

夜ハムナシウサビシイ

九霄雲鎖絶光輝　懶登樓

ソラ一メンニ雲カオホフテ月ヒカリヲヘダテ　ニカイ(上ッテ月ヲ見ル気モナイ

月の詩歌連俳

たうもろこし

秋 金素　皇后宮肥後

月を見くおりふしごとにみまくうらめ
ゆく点も去りがたくあくがるる海

千載　美濃

秋の夜のこころばとはたえぬとも
みのうらうえゆる中人月よりる

續後撰　知家

ながめれいらしよの秋も忘れ
月うしのかげやそうらん

續古今　為家

見れまふ秋風さむし天の原
中しらは月の夜ぞふけ行

續拾遺　衣笠

かさぎのこまるる樹も白さんの
えう霜いそぐ秋の月の夢

玉葉　西行

人も見ぬうらたもるをまでも
をもしん月のうげをそそく

續千載　後成

あづまてもを忘れぬ月の影でらん
よりたがみ秋の露のふるさを

新古　田家月　藤原定家

風はてし田の穂の波ぢる月や
かるもとよむもをぶ水かれらん

月清　池上見月　後京極

池上をむ光をきよく澄んをう
水れ中ケ〜きみはの月う多

詞　月のまも。月のよるく。月のをぐ
月給ある。月のこころ。月の舟。月をえ
てくれ。月をけのぞる。月のえ〜。月の
新。月ふかく。月よる男。月の出〜か
月の入〜か。月の影。月のを。月の
氷。月清。月のぐ。月のぐ。月のぐ。
月白き。かくる。圓。天ぞる月。夜
いる月。ゆ。ゆ。つ夜。上のゆ。ぞう
。中のゆ。ぞう。のぞまれ月。三日の月
。出入る月。入る。の月。元
ゆく月。いろどる月。ぞる月。夜ま
の月。かくる。ぞる月。とまる月。ぞる
月かな。まを。ぞ見。ま。をこれぞ見
月を。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
見まを。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

連 宿ニ入ル せいぐん出る夜の月 宗碩
ふるさとの月は昔一世の形のこさ 宗碩
月やふる蓬そうくの秋の水 宗祇
春こそ月のうらなる花ふる雪盛

俳 寺ちがいなくさらせる柳よ水の月 玄来
撥ぐうもうびせさて出て葉の月 芭蕉
月の座うもい移ると本しもの 素堂

狂 にっぱしをにっぱいつろくねぎつれど
にっぱうとこの月をんごとの月 貞本

詩 月 詞 東坡

一更山吐月 月ガ出ル
玉鏡卧微瀾 玉ノカゞミガサザナミニウヒテアルヤウナ
正似西湖上 湧金門外看
テウド西湖ノ上ノコキンモンーヲトコロノアタリデ見タヤウナケしキジヤ

詞 月ノ詞 李白

小時不識月 ナイサイトキ月ト云モノヲシライデ
呼為白玉盤 月ヲ白タマノタライジヤトイフタ
又疑瑤臺鏡飛上青雲端
マタ玉ノウテナカゞミガミヱデ、ボカトカウシタヤウニアタリヘトビアガツタノカトヲモフタ

詩 待月五字對句 同上

玉彰鳴風久 タニノコトヂカタエズ
自是登樓早 今カラハ月ヲミヤウトテニカイヘ上ルコガハヤイ
金輪出霧遲 コカヲノワカ霧ヲモレ出ルコガラソイ
非于出海遲 月ノ海カラ出ヤウカラソイユヘテハナイ

新月 蛾眉。 法茂 破蕉 抱村子 王翁 蘆金詩集一巻 古猪

新月もいへば連俳よりハ八月十六夜と
もろこし詩よりハ彰月西月とり十三日
にはの月をらんと 撥德 綾が詩ゑ
も 新月 沉鈎 細と 他ゑう 彰月
いあざやるる月とらんあ 加 嵐天
が待のごとく三日夜中 新月の色

と絶句三又後すて名月の多
多論之よろしく新月は漢月とも又
朏とも魄とも 魄字之考 詩 新月纖々抹黛眉 こゝ三日月
三日月 朏 魄 文選 異名 蛾眉 月 和名 若月 万葉出
○月三日月 ○若の月 文選 ○月三日月 又月の月
月ある若の月小なんが三日又明らゝ
なる歳 ゝ月 拾遺 三き事合出
秋 拾遺 森の間ゆ ゆげ ゆ〜いろ〜ゆげ ゆの花 文選
夫左 あぐり人のまゆ様にはなくしも
みくらのそをーき三日月のうげ 紀氣
桃 ゆこたふ雉 接 て三日月 文考
人参のさゝめかどや三日の月 文園
三日月や月のきあれ水の月 芭蕉
蓮の葉のたくも 狂 蓮二
狂 蓮の衛兎いくくさうげきや
眉ぶくくの三日の月うけ 負佐

弦月 ○弦 ○二弦 ○下弦
○の月 ○くゝり月
異名 彼後 右宗府 輪月 社詩 暈缺
淮南子 如彩 文選 恒月 詩注 月名
弓れ月の上弦とゆい毎月七八日ゆ
なりや弦ゆ ハサ三日 歌名
弦くは月の孤まの月 文 弦月の孤
弓を張るゝ 張月 考
秋 月を弦弓張 ゆ
さゝーゝく入ゆ ゆ 順
狂 夜とあさ ゆ
竹の弦ゆく人ゆ ゆ 赤
望月 詩歌 望月は月に満月
十五八月 ゆ
ゆ八月十五日 十五日のゆ月を連俳
八月十五日の石に花と
八月十五日ゆ 秋ーき沈之
不知夜月 既平。載星。二
十八月 八狩。論滅。先鄭。
新缺。十六夜月 先に夜月
六月の月 歌 は秋の十六日

(秋) 新六帖

秋風に雲をいとせゝで
うかべてゝいさよふ月

(詞) きのふの月はくもりがちにて
ざよふいさよふ月。山のこゝにいさよひのわる

(俳) 名月やたのいざよふ床の山　松尾

立待月

(十七夜月。)

(八) 書て須臾の間をもあるさま
なりとの人名をかくなり。紛い人と
連俳に八月十七日の夜とする也

(秋) 新六帖　夜笠内大府

我門せばゝまでひく藤なみの
そゝ立さらで月もかゝるゝん

(俳) 考信録に拾遺十六夜月を結び山川
居待月

(十八夜月。)

(八) 居てまつの義なり
出るをまちて居てまつの義なり

(俳) 新考の坂より伏結めまち月　春波

(狂) 雲の乃絵小町さらでそいさづくる
ぬまちの月のゆゝかなぜーくる　真葉

伏待月

(廿夜結月。)

(八) 廿夜結月ともいふなり
ぬまちゆゝかしおそ
くれば伏て待の義なり連俳又は
秋の限なり歌の夏のもよみ

(秋) 拾玉　裏葉　差園
鶏鳴のゝげうあしぬ社其の夜の
廿夜結の月のかりあけのそら

(俳) 伏結と伏月出る西のたゝびる　野水

更待月

(二十日月。)

(八) 廿日月夫車ともえハ
廿日の月夫の刻に出る所なり
○俳諧にはこれ結の月とも伏とも
わ歌に伏廿日の月とのみよみ

(秋) 雲のゆるゝとひしるを忘よる那
二十日廿日のそゝくのゆゝかぎく　新改

(連) 名もそゝ廿日の月廿夜月の宗祇

二十三夜月

(三夜待月。)

○十雪八鬱至

菩薩の縁にうれば月はのがるとぞ
給と侍に繁至がきろくしひて辞
むなうり西ふ九月三ケ月に出る月約
こういく夜まの月と辞り

有明月

十五夜以後の月之月
ありあけのつき

(秋)のなのつきをなくこゑもうるさうあつてもむりうるのかなし　忠孝

夫婦の間を新れてをえ給なしてゐるようなり出るありあけの月　寂蓮

(連)あ明の月あはかろ山ふ月　昌叱

(俳)あり明やたのもあり月出の月　正秀

(狂)人の世はひまの約　誠をしるべ
地をひはげもあり　ありあけの月　信海

待月

詩寺に来ると月を待
秋月

(俳)月の三秋なり

(俳)待月や待て出ぬ待宵　宗考

(秋)山ろとは雲をこえたるかりうえ
つれなく見えて月ぞまちをる　仙湖

残月

月のまたく夜ふ明おろ
のこりつき

(秋)まこれつるゆくへの見えかりしぬ
松のうへなるこの残の月　西行

のこる秋もかどの見の月うげ小
さそそれ出ー月ぞなごうれ　政為

(俳)残り月の三人去りのこる月　誠人

残月や塩ゆくなまれ都　荷兮

(狂)月新へいるるる秋ったりあけの
かつくしのそそのこもろ　貞徳

照月次

三月月の次ぎ九月以後の
明月の次と毎夜月ふ人

(秋)あれ西さてる月ることかぞふまば
こよひで秋の元数なり　俳諧

次を波ーこうひるーて水の西ー
ひ出ー毎ろたりう

星月夜

星の光りれて中に
星月夜ふ月夜の中にゆるを
をよそ会ふ夜会山ふ星月夜
ろかまろーれ星月夜

の年〻〻人戸の所為ともいふ
り新篇藻倉志ニ見ヘタリ

秋 堀川百首　常陸

我ひとりかまくらの岸こえゆけば
月夜こそうとしかりけれ

身入　妙風八人の袂うらに吹こむ
こむやうにて物がゆるりのん　通志

秋 岡のべやいろもまうぬきの風の
ふるさむさぐれ秋い寒ふ々り

連 ふるさむやくふ〻〻衣妙の風　紹巴

能 ふかむやうふ〻〻ふ〻ふ秋の白鳥水

秋の聲　うんうんとなく物ふるえて
さびしく凄きまとらふ

俳 郭公は幽冥ふそい妙の声　梅水
ふ〻〻ふても匂ひうち妙の香　湘雪

詩 古文秋聲賦　歐陽永叔

方夜讀書聞有聲自西南來
者　永叔ガ夜書ヲヨンテ井タルニトコトモナシニ
コエカアリテ西南ヨリ來タル

悚然而聽之曰ソツトシテコレヲキイテ云フコトニハ
異哉初淅瀝以蕭颯カハツタコトジヤ
ハジメハサラ〻〻トシテ
モノサビシク
忽奔騰而洶湧タチマチヅツトシテ水ノナガルヽヲトガスル
如波濤夜驚風雨驟至下略
ナミカ夜中ニヌツテクルヤウニ風ガ
ニハカニヲコツテクルヤウニモキコエル雨風ガ

秋理　妙の理のけ〻きとく
なる安くいの九月毎の不思

秋 妙の野ふ咲ふ見とる妙物
うきかそふふ花せくこのころ

死ん人ゆうそうぬ妙ぶきて
妙のうぶうつしけるうな　経信

詞 理べの為〻き。ちくさのそる。
為特。死野。妙風。萩の葉
松の色。萩。そうへ〻。ふぢ
ぶうま。む〻。むるやう。うぢ
ら。藤。紅葉。ふ。葉さく。葉を
多野。尾ぶふ。蜂。葉ふく。ふ

でゝこ。鰐うくつ。兎うくつ。古郷
名寄。藤のむらさき。白菊。露。
ちり。かれちるもみぢ

(連)いろ〳〵とふるまで秋ぞ乱れける 紅巴
(狂)うら葉の中もとゝの秋の夢ぐるしや
芝付花こそ多くつけりされ 本す

秋山 秋のふかくたれて面ぐるく明らう
ようるしく何ともさびし〳〵

(謡)秋ふかしちのちばこまさひぬる
蛾ものもくみんやさ猶ちくびも

(詞)雲ぬる。月さしの残る。指さしき
。藤うく〳〵入や。とたゝまの白。紅葉
右の外秋の野ゝ。ゝ抵抗ゝ
(俳)俊彩者の紙帳ゝやや秋の山 如衆

(詩)秋山五字對句

望中疑在野 山形園澤國
ミワヨシノヤマカタニ我身モ野ニアルカ山スガタガ水ニウツリニハル

幽處欲生雲 秋色露人家
カスカニトラキ名ヲ名リカラ雲ガ立テ出ソウナ 秋ケシキ中ニ人カ住テ居ル家モミエル

秋水 清く澄澄てをさはし
く冷さい いろみぐりちり

(歌)ふく風ぬるりる水も涼〳〵 三八
山川ようや秋かゝ〳〵ん 時房

(俳)秋霞といふべきかゝり秋水拳白

(詩)滕王閣記

落霞與孤鶩齊飛 ユフギリトヒツトリトガ
一シヨニドナヘヤラ イフレ ウタトミレバ。秋水共長天
一色アキノ水マスミワタツテハテしモナイ
ソラトヒトツノイロニミエワタル

秋水故事

荘子秋水編

秋水時ニ至リ百川河ノ
両俣ノ渚崖ノ間ニソヽギ牛馬弁
セズ河伯恢然トシテヨロコビ流
ニ順フテ行ク

秋夕 秋の日れ夕暮の淋なる
秋の夜しゝ〳〵夫〳〵天〳〵秋ヨウ

(歌)秋ふる風夕陽ぐれこそ
萩のうわ風萩のまくつも 義孝

新古今 「見わたせば花ももみぢもなかりけり
うら山しげの秋の夕ぐれ　定家

新古今 「さびしさはその色とも
なき山の秋のゆふぐれ　家隆

新古今 「こがらしの
吹きしをれたる
枝ごとに
涙ぞ
かかる
秋の
ゆふぐれ　西行

詞 地ゴエ　夕ぐれ。寒さ。霧。雲。鳴。霧。鳴。
いろぼの風。ゆふべ。しき。結ぶ。
きゆふべの雲。夕ヤ。夕ヤ。雲。
ちそそ。うれさ。ことば。紙。夕霧。

連 ぬるゝ。夕ヤ。ゆふべ。月休

俳 人寄る。寄る。寄る。秋の夕ゝ　和及
「両国」うりのいん秋のゆふべ　蜀二

詩 秋夕詞　趙廸

白雲深處野人家　白クモノフカイトコロ
ニシヅガヤガ。倚杖閑吟日未斜　杖ヲヒカ(テ)ツカニ詩ヲ
アリソウナ　吟ジテイレバダヨモクレ　江上數

峯看不盡　江ノアナラノカズ〳〵
レドモツキヌ　ノ山ノ秋ゲシキハ見
晩鐘殘雨入蘆花　入相ノカネノコ
ヘトムラサメトカ
一ツニ成ニ其ノ中ノ
有タリ(入オカト
イモヘハ日ザクラ)

秋夜　秋の夜の
夜の
秋の夕ハ日暮のゝ秋の夜
夜ハ一夜ハあいだとらん

歌 秋の夜もまぐ明ゆく秋の夜よ
いくさび花の秋さちゝつゝん　資平
「そのうまといくたびまち門秋の夜よ
ゆふづけるい秋さあやハせん　実隆

詞 さびし。夜。ゆふ。秋。
さびしさ。さびよ所のよるべき。まぐ
明ゆ〳〵ぬ。をれ。とり。夜を
うげつ〳〵。ゆふべき。

詩 秋夜詞　無名氏

高秋夜分後　アキノフカイヨセツコ
ナカバカリニ
遠客雁來時　コキヤクハナレテトヲキタビ
ニ居アフコ、ヲキケバカナシイ
寂々重門掩　モノサビシクカドヲサ
シコメテ居レバ
無人問所思　タレモモノ思ヒヲトフチク
ハモノハナイ

混雑 しげ郡えは日令附令並本などにてよくよく見ることを出せ

△龍田姫 旧都の西にあたる龍田山に鎮座せり。龍田彦とともに秋の紅葉を染め出し、造化の神を名付くといへり

歌 我ゆへハ七日ハもらさず龍田姫 ゆめはたるを風うちしらする

狂 そゐさけつきらすり 其來いうようと龍田のひめぎみの名 貞室

△秋宮 皇后宮の御事なり。皇后宮の宮は東宮ともいふ。春宮とも申す。中宮とも秋宮ともいふ。皇后宮は其西に有をもつて秋宮といふ。秋は五行にて西にあたる

△律の調 物に律呂の調子を十二月にわかつ時は秋の声は律なり。呂は春なり。律は秋にあたる

△千秋楽 これ盤渉調の曲なり。盤渉調の音は秋の声なり。萩女郎花の風に吹しくらぶ……此楽いはるる祝詞の……もつて舞楽の……千秋楽といふ……

歌 萩の花 花の下……ちらせ花秋のうげそうかまつ 猿丸

俳 千秋楽仰べのゆふの……「千秋楽は長酒の部 秋人

狂 簔笠の千秋らくにあんまらん……

△鶉衣 貞徳の日ましびんの縫き……

俳 衣をこふしく……そばや鶉衣のたなまたなる 其角

△田の庵　田に稲の実のりある頃附たる鳥獣を追ひ
夜は鹿猿などにいりさまたげ
として田のかたはらに仮菴を作り
て田を守るなり　天智天皇御製
かりほの庵のとまをあらみ我衣手
すゝばまて仮菴の庵よしふる
なり

△小田守　これ田をもる民をいふ稗を猪鹿の損ふ
（俳）小田守の水湯まうしる火挿が挑燈
かねみの番をまもるなるべし

△案山子　△鳥驚　△鳴子　△添水　○かゞし
田にある鳥を拂ふものなり
○僧都は普光寺玄賓僧都といふ人
稲を守りて鳥獣を驚かすを
始しゆゑに僧都とも
いふ　三国伝記に案山子を僧都と
都といふ僧都はソホツなり

曾富騰として　非代巻に書く　添水の名
又玄賓僧都なりといへるは
古歌よく解せざる者の説なるべし
しそかつしそふづかならがひ
まてみるべし今の添水も玄賓
以前よりありしもの元歌二階の歌に
（歌）いうびきの田にたてるそほつこそ
持のかたのまを人をかくなきま
山田守そうづの身こそあはれなれ
秋はてぬれば問ふ人もなし　玄賓
玄賓が稲を守りしといひしこれの歌
うすいへるもあやまりなり

（俳）人でさへ人を笑ふや案山子　信徳
一俵もとらでかゞしの弓矢かな　蓮一
（狂）鳥拂ふ案山子の蓑笠を
ひいきなる宿の夕ぐれ　景天

△添水　今の世の民の製するものは
渓澗の水の流るゝを
受けて自ら鳴らしめ
割板竹竿などにて製す

雁　ちさごひ板のよる音うに若うけたる地と蓋後書こえば

(俳)秋の夜れ浦の雁拘なる　如泉

鳴子　縄と長く鳴子を付引て

(歌)秋の田の門田のなるこいろ〳〵世にのろ〳〵ん　後土御門

ひく人もなき世にのろ〳〵ん

引板　板なり〳〵童もて縄を引

(俳)鳴子と走り去りける物と

これを蒙る〳〵　とうて

(俳)我役と云ひもまして引板者之名

(歌)何とかく秋の田のこうろ〳〵　秋の田の

ひさ引ろ〳〵ひさ〳〵　西行

鳥竿　竹と縄と考〳〵ふら〳〵有

て引ならしあ〳〵ふ竿

風よも鳴るこという〳〵竹のさき

と鳴ると付て名代抽ひ〳〵

(歌)秋の夜ふ(更)て紫かさ〳〵ふる光うと

鳴ひ竿ちてる追へうるひ

(連)鳴竿九月よひ(き)孫ざ武　玄仍

(俳)鳴竿の始めて搖し〳〵水の星　文玉

やきし〳〵馬の尾を焼てもろまぶ蕪

焼鼎　其香とつ〳〵て寿〳〵ば

〳〵これをやきもろ〳〵ふ

(俳)焼鼎や拾しい出の翌ば〳〵　椿寿

柱木　此部よは三枚よりて成

茎本を出ば

柱　まさきのかつ〳〵　まさきの

ちの此文字ない正木の方

茎うきを二ツ合て俗うし日本の

字のまさき数種あり一種い蔓

せのもの紅葉〳〵て冬葉を

るものこれ実の柱なり大和金

剛山いこまう〳〵也及び畿内の山

よりのもて人家

あ〳〵び人家の籬よ抜ろ物と

いへるい枕紅葉せばち抜ろ正木〳〵

まの正本と遠人之

(俳)垣の石ねけて柱のかつ〳〵ふ千代

(秋) 霧ふかい所の〜道遠し外山なる
まさきのつゞら〜いろたちそめ
(冬) 雪ふり外里まあし
ちりうせぬきのうら〜きのやま

荻 をぎ

きのさなり地俗名魁蕭
ともに風ふるのとしあ雪の
牡丹くさ雪のゆれば和歌には大なる風
をむもつり蘆荻と云て水邊にも
みやびたもつ名物なり陸奥にて
さつ〜名潔さ地て長のそうぐ者
つて風のそやなる紙事ら夢に
(連) 荻の葉に朝霧ふる〜風も
夕べ入る風やそと長の荻乃変 全
(俳) 荻をゆ〜風ふせく秋の風 此月 風雪
(秋) 荻の風 風雪
さとうれの物ひをれ我やどの
ちりぬの葉ふてうぐあの風ぞふく
(後撰) 妙風ふくまつけくもとりぬ郭
荻の葉なしかぶりてまし 中務

薄 すすき

へ穂のもとき〜二りともきき
穂ほそき。尾ぞる。

もとき〜きぞは芒の長く義とする
をそ人芒をまくあ間まる物るれが
紙り出芒の名とうもとう。大なる
ちい長に天人よも拙さ八月
白き花を用き穂とう風形獣の尾
のごとし風ふ人尾花と云歳内ま
て毛美は赤尾ふ〜れえく穂ふる
を麦ふ〜歳は芒ふ〜きみとく
そふ風もまのく西方ふふ。葉ふの
穂のごとく態あるものの葉の穂尾
いつなとき二村とき二〜ものの
なるべ紙ぐふ今稗樹影ふそれ
一本をきふそ別ふ麦まの物ま
全くを世のなるべし。條芒と
をいもをふ出ふ穂ふ〜ふ。
ふまをきふは堅穂あり
(秋) 風ふは穂ふそきまかふ〜 孔仲
うち志ふ〜義の穂のうれいたりつく
みふ〜風ふるびく村さあ 定家

詞 ちびくこと〳〵き。まのあく落。彩
場の落孔る〳〵。村とこき。一村落。
屋。まがき。秋風。かくさる。

俳 いとみ〳〵修論よむもとぶ落る其角
秋風のとぶこちうちうりむ落孝吟

連 秋とゝが紙家ちびく落る米紙
いとゝき

糸薄

糸細く糸のごとく長きい
にはたゝ吹ぶむ〳〵ひりせ

△ どすくきと用〳〵さ茅と生れ

俳 いとまくきこつぐ雑のうちゝ方舟

狂 茅ちりぬれみとゝたち〳〵白落も
きづれくねけるいとまくきうる

糸をくきてうゝ〳〵れ極毛て
あどうる茅の玉れをにぜん右上天皇

葛葉

△ 葛葉 葛葉くどゝ。

△ いるゞ人ゝとうちバ秋茅〳〵ぜ〳〵る
ちべ〳〵蔓毛く葛その蔓ゝ付て
茅〳〵やいうゝ〳〵く 裏あどゝ〳〵
白〳〵秋風ゝひうゝ東葛の

〳〵見るゞ毛ゝれバ茅人葛の葉
のゝ〳〵と蔓て人の眼の葉ゝ白

狂 なまさうゝ多あゝ坂の葛ゝら
ものゝ〳〵〳〵〳〵て〳〵を 物洋

「うの間ゝ葛うる秋のこまてゝ毛ゝど
ゝ〳〵〳〵ゝ珍ゝとてあれ 明珍

詞 ゝ愛ゝを風。京の秋風。吹ゝ〳〵ゝと。
ゝ風。京の秋風。茅もをまゝる
。ゝゝ。ゝ〳〵もゝる

連 秋〳〵れ風ゝ茅つく葛葉ゝる 昌化

俳 さもゝ白れ〳〵ゝ葛葉ゝ第 蓮二
「葛の葉い毛んゞの山ゝ〳〵ゝゝ 表水

狂 葛の葉いゝ〳〵ゝ毛ゝ〳〵ゝ
風ゝ〳〵ゝ毛ゝとゝる葛の武蔵ゝ真ま

忍草

出ゞ〳〵ゝかの形繰ゝ

△ 俳 猪毛ゝ奇毛ゝ
ゝて歯器捨の葉のごゝ物と
ゝゝゝゝ〳〵ゝ秋ゝゝゝむりのゝ大ゝ
たゞゝ〳〵 補遺ゝ葉ゝ 論化

俳 志のゝゝゝ宙ゝぶゝゝ毛葉ゝ 復化

葛

異名 龍州。赤葛。五爪龍。

○赤葛。烏蘇。蘇ハ漢名

○乾葛。こてい人家の墻間に植て秋紅葉に茂るくは蔓物の總名なり各ふう各ふう數多くして花内に多く秋紅葉かぜにもあれど連歌の語法の葛ふきもまた秋なりとあり

芭蕉

異名 甘蕉。芭苴。芎

苴〈やまだ〉せを九月の季なり

「芭蕉」の風のはさえぬさびかな

秋根さびのむ雨ぞりのうき 蕉

(秋) 舟ふねの帆ふる風の芭蕉哉 一鼎

ふびんなる風の芭蕉なるぞせばし 水

(詩) 七言對句 詩礎

長葉臨風標緑幹 清更妍

ナガイ葉ガカゼニヒヤヒラカフテミドリ ミキヲアラハレミサセル

キヨクシテヌウルハシ

赤心凝日吐丹誠 不眠愁

ツカイシガヒニツツテ カタチヲアラハシニサル

ヌムラズシテウレフルヤウナ

景天草

一名 敗花州 異名 瓶邪 掛壁青。天竹 和名

いきくさ。ちくさ。てきりそう。

ふき。舞美草。いと児女子の付し草

多くそら豆の葉に似たり形丸く

形ふ掛日ども間しるる白線を

載るなど又淡へ赤ふいき草とくるする

なを しめ比強きなり赤茎まとらん

くさのこと ハ百井の花。神の

草花

花。神の綿 俗名 秋花

女郎花 みぞ〜し 萩 くど

むし 秋〜花を多くもて歌は秋の

ちくさ〜も又ちくさ〜 俗

(歌) 千ちくさ〜なる花の

いろ〜の花ぞあり多

よ赤 さまざまの花とは花べの秋の名

麻の葉さくら人世べの秋の名

(詞) ちくさ。花のきく。のべのちくさ

濃のさう。秋草。のべの綿

連 朝夕を霞のうちに花沈む宵白
咲きうつるれぬ花のらくさちる 宗牧

俳 菜花や秋さりぬるに拠ありく 蓬二
閑けくゆけば菜花黄ゆるく 紫朱

狂 花の際女郎花さもきせもとは
みてなきしくわれもそうりく 由莫

詩 草花詞

幽閑不附・・・蘭芳 コノ草花ハカスカニサビシイ
トコロニ咲テ菊ナトノ華イ・タリニハヨリカタ

自向江濱・・・占 自ノ・・・ハ(タリ道バ
タナドヲス三ドコロニシテ居ル

道傍 ワガテニ江ノホトリナドニハ(タリ道バ

晴日暖開粧・・・麗景 一日ノウルハシウ
アタヽカナジブンニハウツクシウ花ヲヨソホヒタラク

吟郷・・・蒙詞客入 秋ノ・・・ニ花ノ・・・ニホヒテ詩ジックルヤウナ風雅ナ人
ニオホヒカクレヤウニカホラセテ詩テモツクルつゝロニ出セルデアラフ

鶏頭花 異名 紫冠 ○花の形鶏のとさかに似たる故名づく 猪鹿多

俳 去師村さうへ鶏頭花 宗因

雁来紅 まの紅 ○葉の色の紅なるものを雁来紅といふ

かまつかの花ちらぬうちに紅葉紙をかうまつの花ちらぬうちに紅葉紙

死とまるとも書きうの人の命体寒まくして秋さむ 黄鶴

初夏の頃の麦の穂に似たる 連二

俳 ささせてはんぐやはり秋の麦の穂 連二

絵くゝて何ぞ〜ぶどうえけいこう 芭蕉

狂 赤ふくそいまうそいまうそいまうそいまうえけいこう 自胸

詩 翔雁南来塞草秋 葉ケイトウハ雁来紅トスガ南ノ国カラトビワタルコロハ辺塞ノアキノコロヨヤ。

未霜紅亀巳先愁 タレモフラスノニコノ葉ケイトウハヤウレイガホニナル

緑珠宴罷帰金谷 リヨク珠トスラ美人ガ酒宴スニデカラ金谷園トヨ所ノモドツテクルヤウナケシキヤ。

夜不収 サノ七尺モアル珊瑚ノ・・・ヤ。

七尺珊瑚 味カ夜モカガツテ有ヤチ

白々 ・・・

紅々絢繰霞 白イト赤イトガ繰タ。カスミノモヤウノヤウナ。杜丹雖好不如它 ボタンモヨイモノジヤケレドモ。無端蜂蝶休相近。此種元來不是花 是ハ元ヨリ花ニアラズ。花ハナイホドニ

白茅 △茅萱(種類)沸茅。萱茅。番茅。蒐茅

△つたの茅 素ハ茅を出したるなり。小児好んで食し。根を茅根と云て甚ご美味なり。又俗に茅根と云て蔓延して根を抜て蔓根と云なり。△小ぶやらふいとしきかやうなり

△高うやとつたいたうく立のぶり

(狂)高くもまうさうけさぶといつくをもいろづく秋のそらやなりせば 保重

△萱刈 △萱蘭△萱草△萱草 ○茅萱 △萱草刈小く萱の秋大なるもの之秋刈こく家根とふく之いはゆる茅屋らふくるふるうて満足給う 茅屋ハ茅ヲ以テ家根ヲフクル家ナリ

繰くまてこたにちいさき草なるどさいきもしいだ草で萱ハ別種なそ大なるもの之ハ出る△萱の郭之出る△萱刈 △萱青△萱刈 萱を抽出之ハ出る

(秋)かごうのれんがうやう刈塚の月もんの月をゑれそう 越島明霞

○此歌い秋を和漢さぬきの國ちく泳せ給ひしるとぞ此御制ようて

かやが刈塚小遠き秋寺ぞ分

(狂)かやうもつつり

(狂)こがひみはいはう秋ど家とふくの物

いうぐのるこはるれをいふうや 道喜

角觝艸　此草の葉とるけ玉ゑ引合
△ちうくさ　小児のけれむまとゝ戯
相撲草くるゝ根こんく剉〳〵
よりこ名紙附瓶で力草とゝる
(俳)草いつもとゞくねんとまひ艸　乙由
もまひ草の川堤のち張る側まり　許六

犬子艸　この弱尾艸も出名。葉の○状
△　穂出る穂の尾のごとく栗の
蕾る似ゝり俗雀の栗ゝらん
(俳)ゝらくゝ鶏頭ゝ栗むいのこゝろ　於風
(歌)ゝのこ艸おのゝ多く穂を出く
炊をく片色孔雀中ゝうゝん　為家
(狂)ゝいゝ似て今まれぬりのよいのこゝろ
ゝんくゝしゝゝゝうねなりゝゝ　此条甫

しきどの
萩殿　萩の戸・萩中清涼殿の
△　山の方ゝ萩を極ゝゝ所名
分ゝれゝゝゝ　禁秘抄萩中老の御
所ゝ萩ゝゝぎゝ泥炊の花いろく極
ゝゝゝこゝで附代ゝゝゝ

(歌)後千載

後系極

萩の戸の花の下を流れ清溝の
ゝくせの秋のうけそうゝもゝ
(連)萩の戸のゝくゝもし秋のうけ　昌叱
(俳)萩の戸やゝゝ　きこゝ義仙　浪化
(狂)萩の戸ゝ花ゝゝ
ゝくゝゝもちゝゝ
くゝ　柳里

花壇　一名園。芝の花れ畑。艸の
△　ゝゝ春ゝ秋咲ゝ春ゝ

(詩)朗詠集　前載
多見栽花悦目儔　ツク花ヲ人ヘテ目ヲコロコヒ
人々ヲ。見ル　此時豫養待開遊　ソノ時ヲ
ヨリ早ク草木ヲダテ、花ノ開クヲ待テ遊ニヤ。自吾閑寂
家僮侮　ワレハヒヤ身分ヒヤケドメシ者カフサワナニヨツテ。春
樹春栽　秋草秋草　春ノ木ハ春ノ秋ノ草ハ秋ノ花ヒヤ

(狂)ゝゝ花の花ゝゝ
秋ゝばゝゝゝ

鬼　一名焼茅。挂金焼。
ゝ　姑娥草。神代巻ゝ破茅

カ、チと訓ずりに又月とるを
らゝき秋美とむとゞ

(俗)鬼灯とあるとこの枝がうむゝ 酒豪
鬼灯や医者感じて、そく心の臓 主志
(狂)かづさいつろのうきゝ鬼あけて
かゝぎとき[illegible]ゝ 幼年

新番椒

番椒 番国そろんと国の
ゆゝ山地元南蛮ようき
うり 唐番椒とゝゝ天正年長の比
物ていつ[illegible]ゝ伏見ゝ栽培ゝて大きく
年ゝ[illegible]ゝ其外種類あり
(俗)ゝゝ蛮とつの根ゝ花や唐ゝし 世俗
絵もゝれ姿やゝけ紅ゝゝし 蓮二
新番椒御用見ゝ嘉永の頃ゝ 潮十
ゝ

若烟草

(漢名)烟草 (異名)相思草
浅婆姑。選擇草。蕎。
本名条瓜。緑羅の紡線。
(蔓)草ゝ 六七月ゝ蕎き
ゝゝ花ゝゝゝゝ手ゝゝゝゝ蛮ゝ
近世つゝゝ若き物をゝゝ田楽

布瓜

とゝ食用ゝ記ゝ
(俗)ふゝくゝ花ゝゝゝとゝゝゝゝゝ
(狂)世のゝゝゝゝまれのゝゝのゝゝゝ 綿
ゝんのへちまれのゝゝのゝゝゝ
薬用 夏の冷ゝ人糸瓜の水をいく
さびもねゝべゝ一生寒を去る

薑

彩生姜(俗)ゝゝゝゝゝゝゝや系ゝ
ゝゝまゝゝ根ゝゝゝ 雷路川
(狂)かゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ汁ゝゝ ゝゝゝゝゝゝゝ 若州
牛房ゝ (和名)悪実。一名牛房
ゝ。きたゝ。うゝゝぎき

芋

(異名)土芝。蹲時。家芋
(和名)露元草。白足草
芋の種類多ゝ 平草ゝい十に種
を蒸ぐゝ和名ゝ ゝゝゝ水ゝ
ゝゝて形ゝゝ ゝゝゝ国石の方ゝ
ゝゝて俗ゝゝの名ゝゝゝゝ

頭の芋

一名紫芋。阿芋。
○洛の東寺村ゝ 東村

のもの天下に冥し又芋の孔太良し
て九三升斗の袖あり茎と△どへき
入れいまだ入いまがらもなし
(俳)一霜の宿さや芋のすみ刈　支考
(狂)秋風に無残のよさてうく疫る
わりなき繰さくへりせかりそり　自見

薯蕷　やまのいも　△とろゝいも
［異名］山蕷。銀條徳星　山藥　○種藷をし
△自然生を野山薬といひ
山菜とも云人の里に栽るものと
△つくねいもは又家薬とも云也
別名佛掌薯とも云芋の形手をひ
ろげたるごとく故へ是とも此の國にて
は扇芋とも又拝芋礼拝のごとし
長芋は家山薬なり　此藷の形ち
は長うして甚おちがきしの薯蕷芯
時は風水時候よくかんじて鰹ず
るを古代より伝へてるゝものあり
(俳)堀るやいまだ蔓根や山のいも　栗二
煎なしもやむりし桐馬の肉嚢殊　芭去

零餘子　△ぬかご　薯蕷の蔓にまとはれ生ず　食用になり

甘藷　△さつまいも　元禄の始め琉球より薩摩へ来る

果　△このみ　李。杏。梅。桃。栗これを木の果といふ又瓜蓏の果と
云木の果は多く秋実のるなり

(秋)新秋秋数　草木ともに佛の心ねを守るべ　深釈
この実となりてまたのもし
誰も皆おゝけのこそわかで　明考
しゅみるかしもなしさき見やれ

わきそくにゑんても枝の果哉　芭蕉
木つつ風のそよみせたるてのしる　去仲

△柿　かき　［異名］赤実果。爽食。霜長者
乳卵。赤心。朱果
(秋)穀本　後乳
知らしてこのをもまゝんのされが
世なるにきくつれしたなり
(連)落掛ぬ役雪にせよ柿の本　宗玄

(俳)柿こゝに逝きるへて蘐蕷る玄孝
柿の木やとゝく自慢の親仁哉　岩翁

(詩)七字對句　　詩礎

垂枝星實纍々熟
タレサガリタル枝ニ星ノヤウナ実ガフラ〳〵トジユクシテアル
帶葉霜皮顆顆乾
葉ノツイタ柿ニ粉ノフイタ皮ガヒトツ〳〵カハイテ見ヘル

千顆蜜
カズ〳〵ノミツ
一林霜
イチリンノシモ ハヤシニハイニシモ

柿の種類　へ御所柿和及御所
村より出るもの最上とする故に
たる柿とは和州にて平柿といへ

(俳)御所柿も庇ハせぬ遠江の雛　芦本

△御所柿は不稀に似て味おとれり

(狂)手かしびを揉むけ孫の思案と
唐がらすく似たる柿なり　適春

△邂逅柿味をよくとして家
を見遁るがたらしめへり易く

△柴柿形たまこのきよしコ子り
小形よりふて渋あり

(歌)若聞集　春覚法師

霜柿けるゝねりて柿その従から
ふくぶべきあるりのみぞなりける

△筆柿かさら小ふりして長く雌
筆のごとし又方言なるきご山
へおとよ柿ともいふなり

(俳)筆柿やあるじの留守に笑まれ　昌房

夜の外の八王子柿○旅老柿○国倉
柿ゝ久保柿○象牙柿○君遷子
多く種類多し園ての水去より
て味も形もいろいろなり

醂柿　㊄　渋柿を石灰に漬し又は
そばがらの灰けに二三日
浸して渋出せば味甘く変るなり

(俳)澁柿や渋柿さらは秋ころ　其角

△串柿　㊈　柿のまゝおのを美に細
めて紐に自然に和熟す

△釣柿　㊅　澁柿を多くつるし干して
乾かし甚美たり漢の
丹陽屋柿を樹のまゝに摘
ん防ぎに次に要も佳之

△柿餅 渋柿を拾ろ〜末の粉よ
和〜蒸す餅と味
もよく〜良風の義あり

(俳)柿寝やせと味ふくしやと人 利合

△梨子 異名 まこ果。千洲雪。玄圃実。百菓宗。

快果。菓宗。玉乳。蜜又。

種類 水なし〜△山梨 △まこ〜

△床梨 △近江梨。松尾梨。空
開梨 せ濃梨。大雑。津軽梨
田舞不ゝり出る大なるものハ開り
まこ又ハ六月あり大雑らく近江
しの志賀郡里より出る関東
梨芦浦梨寺より出空開
梨 肥後より出る

衣笠尼書

(秋)六月

年ふるにかゝる波のうらゝ
たゝぬもあらぬもみてたゝぬと

(俳)此梨ハ雑ふるにかゝる芭蕉
梨やいく秋の後ぬ霧の味乙州

(狂)けあげたる鶴のゝくゝふゝきく
屋の指ふたりやありの実 未舞

△彩妻梨 数根のそしらみくる
実をくく彩いはの
つまへるはこばたり

(秋)かゝるべきうれさまく滅なり
ふるきのゝさいのつまゝ〜の花

△秋田 (連)山松の本のゝ
はなく秋田うゝ 宗祇

(俳)田のゝ色 稲のさつくゝ

(俳)田れい
(秋)孝荷の紅葉の体技 芳雅

△稲 (吳老)△稲葉ハ多く七月の季か用也 稲

△水影艸 ○冨艸 八雲おこ
葉の雲ハ七月の父記を稲も七月の季
寿稲の沢季 博物筌ふゝ寿

里志ゆうそ田れいるほかのくと
雲りくゝ紅の渡りの川ふゝ 志園

いろ〜よ門田のいるか吹くこ
風の神ふくゝ紅くもくゝ 龍先

(調)いなばの波をくての稲。いなり
波いなばはうゝ。いなびの雲

(郡) 絃用ゝ稲を用ゝさゝ寸 龍正寺
「稲ゝ出て用出ゝ稲の狩ひゝ 美濃紙

稲舟 いなぶね
川ゝ多くよめり

(說) なるゝ川のゆれゆ合いるゝもの
いるゝはゝ流てこの用もう
計秋ゝうりて食ゝてゝ
いゝをいゝゝのゝ
ゝなるゝ秋秋ゝ

(郡) ゝゝゝ波とのせゝ波のゝ 宗用

稲刈 いねかり
○秋田刈ゝ (郡) 稲刈や
同ゝ

(說) 山里の秋をゝ門用ゝ
ゝ田ゝ稲ゝ世ゝ
ゝ

落穂 おちほ
ゝ穂ゝ寡婦ゝ
ひゝゝ素ゝゝ

(說) 稲穂物語 安ゝ

稲干 いねかと (郡) 發墓ゝ稲干窓へ
ゝ織ゝ郡 其角

(說) ゝゝ田のゝゝての稲と門干ゝ
ゝ

稲筵 いねむしろ 真穂の筵ゝ稲のゝ
ゝ面ゝ

ゝ稲をゝ筵ゝ
歌ゝ筵多ゝ 妻ゝ補遺ゝ論
ゝ

稲打 いねうち 稲場ゝ書ゝ稲とう
けてゝ奥ゝ

(郡) 天ゝ年貢ゝ稲本外 改村

(狂) 秋の田ゝゝゝ
民のゝ 奥柳

稲扱 いねこき
稲の穂を
近世ゝ扱著ゝ竹二本
のゝ稲のゝ入て
ゝ業ゝ
ゝ宴ゝ
ゝ櫛ゝ
ゝ稲を
ゝ其ゝ

右筑の稲こき出してうゑ寒蝉業
多くありしかば俗号して寡婦艶とゝ

△新米 ちんまい

△ちろ〳〵米△玄米。八月
の産まれ
稲の熟とろ〳〵と書あれば
(俗)新しやま 摘箱のちろ〳〵米 秋晃

△綿毛 ちゝこ

△赤綿。綿ハ赤ク
茎綿二種あり 樹綿ハ
赤も大きく花赤く甚だ美
パンヤ〳〵も同本なり 綿ハ
今所々ハ茎綿ばかり
綿とりや 蓮の日和 合書 呂抜

(俗)ちゝこ ちゝこ 綿を切きのけさつ 綿
ぬるとぬ 綿ハ 涙のエア〳〵たま 由蕪

△桃吹 桃の実ハ小き桃のごと
ちゝこ 朝中ちゝ 綿と吹出

秋生類

この部ハ三秋と
涼る生類を出ス

△蘇 しゝ

△麓 △蘇院 △蘇笛 △蘇
垣 △妻乞蘇 △蘇の類

和の異名 △紅蓮の異名 △ちゝこ 綿 △せき

伊花。花山茶女。芙蓉郎。まち
君女。角仙。綿馬。胡蝶。

異名

○牡蘇ハ角あり牝蘇ハ角なし
牡と蘇院〳〵もいふ。牡蘇ハ
牡と呼ぶ秋の夜ハ牝と変る夜帰て
△蘇笛 しゝ ハ牡の皮ハそもうときもの
もく笛ハ花にゝ吹ば蘇の声ふ
吹る夜牡多く出て猟人の居る
何ようへ近くゝるを押〳〵 完之入
武ハ孫ようけ元ぢゝ 秋の業なり
△蘇垣ハ田畑へ蘇ばかりせまゝき
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ垣

(秋) 夜ゝ とぐる
とぐる 峰く牡 萩京朝ちく
多び 行人を門とゝまん
秋晃 とぐる

秋上の雲の友をやまこしぜの
ものなれ顔ぞうらぶくる

かせき　素名

ふるくるるくるせるのけちきて
ぞうとなぞうそぐ　素名

萬傳　紀貫之

りくらの名の山の名の道
ゆくうもひくうゆくう那

白雲に秋こそ踏ゆ口びゝ　貫之
藤のうく孝の月ときはして　忠岑

合歓

ちまこつる藤ぞ鳴くるひう緑の
藤の白風みやまむん　大進

歌

さきゝうのちまこつ藤ちいるる
ゆ山へうれて恋ゝうゝん　俊能

後撰拾　月前藤

ともむ月れうげとびよそにやぎ花の
花のトかれ藤やたくらん　元資

山家　田唐藤

小山田の菴ちうく鳴く藤のまえ
地ぐ鳴のされて地ぐちうれう那　西行

詞　藤の紫の花のれ書。藤なく
。ちまこひ。藤なく山。花こ地ちこ
れ。月なく。花のが紫。ちまこ
藤。素なく紫こ花ふちまこ。地区
。紫ぐようれ。朝の藤。紫うこ
。鳴ぐれ。命ちまこ。
。ふぐゝこ　ふちこ紫なくの花と
のまこ。藤　花のふちくこ。むち
まけ　花など分藤のひ。山ちとこむ
ちくくちう　とちむの紫のこうれけれかく　ちこうん
。され地の紫ゝひ　特人ち紫ちこ。あひお
ゝ藤　ちきと藤とはまち地の
ぶくく秋なちむちう

連　藤の色紫色ちれまこれこ　心敬
ちれ色ちう月こ藤なくれ門里な　青梅
さうゝれ鳴ちれ花ちれ風ちれゝ　因桂

物　小男藤やれちれ色ちうれ　甚角
藤ちまこうれちや明の藤の藤　烏帽
ゝ藤夏い鳴こ花ゝ紫ゝ　紀貫之　特苗

「秦笛を吹の「風」ふきて秦武陵川「陽」女ヲト弱くなられ秦の如く

(注) よろこばせ給ふ。ふるまひ給ふ。秋の夜の長き白雨

「秦笛の聲うとうとしく」幾燭も

ゆくれけるの長くあり。夕陽波浪

(詩) 鹿ヒ字對句

詩礎

作對御花歸遠洞 何濯々

ミカハシレヲサツプテ草ヲクハヘテ トヲキホラヘカヘル

成群攜草過山林 更呦々

又ヒトムレニアツテ草ヲヒイテ山ヤ林ヲスギルモノニヤ 又ウ〳〵トモナク

廉故事 二女紫襦

搜神記。 准陳氏

田二豆ヲ種ニ感テ二女ヲ見ル容貌甚美也紫ノ襦染ノ襦ニ青キ裙ヲツケ天雨フレトモ衣濕ナシ陳氏アヤシミテ壁ニ鏡ヲ掛タリケレバ鏡中ニ二鹿ヲウツセリ是ニオヒテカヲ以テコレヲ斫ル

鶉 本草 倫勞ヒ

ツヽ〳〵リ秋ヨリ

キイ〳〵ト鳴く 倫勞の種類ヒ

ヲヒさもあり ぬ ぬ

食ふ容形ヒ 鶉ふ似ヒ

ヒ多ヒ書けども此字未詳

(秋) 凡ソ尾死ガ未ニもどらぬ

秋のさうとう ヒ ヒ

(俳) 鶉のなくふまんうし 鶉の秋なきもしん 鶉の秋の聲 鶉の

鶉早贄 (俳) 鶉の州芝。鶉ガ堀

州本の立枝ヒさし 美きて美く先

をよ贄ヒも州芝ヒも玉ヲ贄ヒ

美人ヒ 松矣ヒ 供ヒ

皆本の枝ヒなてヒ

ヒ ヒ ヒ

ヒ ヒ ヒ

(○) 栄蓉曾 倫勞の

芙蓉ハ郭ニ諸葛ヒ

ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ

(秋)畑振又は稗のあえたて　後花
まで乃田長又まのびるまで
秋の田又は稗乃又は[illegible]
秋うたむとぶなくまの風　花光

(俳)又雀や稗又は蓮乃穂を　三惟

鵙　△目を絵　を絵を　△目を絵。絵と捕る
△目乃目を出いてきろ不あ
く類とかくしめて尚友を嘲
て元るかう

猟田　猟い田乃雀を除くる
磨去又は四時よりあり

△牡を猟又は猟い牡の殺たり牡の殺
乃又去さぐ乃去乃去のあり

鵙　△時の羽擬　百羽擬△又は
　きしかたしきかりしき
幸弟殺又鬱又は乃田乃
い人時の宮ハ田乃宮ハ田乃宮ハ田乃宮ハ田乃宮ハ田乃宮ハ
宮又はあ〳〵ば猟殺基ば　ば十八
ありとろう田地の間を絵む秋

又て羽を鳴〳〵ば風霜鳴きうく
秋人の鵙　三才図会本草
○夜ふけて去ぐ〳〵羽とうきかしば
左百羽がきの羽うきくもいつり

(秋)あつき時のちあがき百羽がき
君が来ぬ夜を秋ぞうどうく
〳〵衣とそ世の唐のうまく〳〵
独り時の[illegible]ちを秋　実茂

(詞)百羽うくる。ちの〳〵時。さい
ぶの時。たてる沢辺。時ちの沢
時ぶ。門田。ちの時。秋ちの時。
の羽者。あつき。

(連)三時ばかり田ちの[illegible]る宵柏
三時も月をまぐさねきいる　紹巴

(俳)時ちて書へそぐ蟻の法師る由慈
残月や秋〳〵時の[illegible]の生来

(狂)羽うきの法乾うかたうかどちを百万べん
時あううきれ天台う帰く　貞柳

鶉　△行鶉△のけうづ〳〵△鶉鶉
△鶉　鶉△うづ〳〵蒙

東北に多く住す。俗に敷ふ。仙台藩の名あり。いづくもさふく荒地あり。たゞ侍〻窮屈其の性渡うく横柄をうんぬ。貧人は乞食人熟居たるもの。其子出家ハチ〻コ〻らつが如し。△行熟い女婦えうれて居るを△駄熟い驚るよう。△熟の原。△うづ〻れう〻不とそる。苔むしろ。原にのれよ。△もよりの△熟義いう〻を飼義のゆ。△熟綱いうづ〻を五綱。

秋 山里は秋の来ぬと人目よくる。外面のゆ〻しさ。うづ〻鳴。実紀

山田守るきりぎすもふせやの風うけば何ぞつゝして熟ゆ。人丸 後撰

詞 尾花ぐ〻。をのゞふ〻ど。神の原。かけうづ〻。里のうづ〻。をのゞ原。きりのまゞれよ。鳴うをうやう下。をのゞ原。ふる。野。嵐の城。はゆくむこ。黄ふく。くろつてひく。

俳 うつ〻そ晴。五沢やまの〻浦。蓮二

「栗の外とは人とよる附や。鳴うづ〻。全

注 秋だうう。進とかそうづ〻きや いまも。蕎麦。うつ〻。ちくさり。真尤

鱧 異名 腮魚。紅矢生。盧 濱居。松江魚。

川にも海にもあり。大小よりて名を異にす。小とせいごとの人。

詠 秋風。ふとう。きつる舟。ろう。

「うの一さ〻。社名。太ひく。西行

「何〻。人の美にのう〻うとできつる あまこや。人丸 雜行歌を

「秋の夜の月の浦より舟出して 月よやあまの釣舟つ〻ん。家隆

(狂)けとうり　麩　麩料理の名さ〜うき
何〜ぶ〜ぶ五人さうり他つてきうり　九利

鱸膾　故事

金虀ノ五膾　南郡記曰呉人隋ノ煬帝ニ獻ズ帝曰
南ノ佳味ナリト　東

秋風起

晋書曰張翰字ハ季鷹呉ノ人ナリ洛ニ入テ
大司馬東曹ノ掾トナル秋風ノ起ルヲ見テ忽我故郷湖中ノ蓴菜
羹鱸魚ノ膾ヲ思ヒ出シテ曰人ハ
唯ニ口サレニ適スルコソ貴メ何ソ
此數千里ニアリテ身ノ名爵ヲ
要センヤトスミヤカニ官ヲ棄テ
呉中ニ帰レリコノ意
ヲ和歌ニヨミテ

(歌)秋風ゑ鱸のなますうらひ出く
幼な人の心ちこそすれ　後拾

鯽　異名　吹泝。鯽魚。泝貌。阿浪魚。蹄涂

魚。川魚。泝ちうを紀不に有
く水魚ゑ澂紀

鯽釣　八月の赤いよ〜く大く
なるを釣て鯽人海ゑ
ゑ紀川ゑ出るゆ物びらし只
月の出をよう〜として夜中より
舟と出て不〜此魚を釣中
浪花川口ハ赤ゑ紀ハ〜

(俳)鯽釣や水村山廓酒旗風　嵐雪
えぞつりや釣際の篝の火れ　言水

(狂)芦の葉ゑ鯽用とりぜたるぐ
舟ハたぐ〜竿もぐ〜　未里

江鮒　小瀑　洲走

。鯽の小なゑ。りのちう

(歌)山家集　西行
つ〜ぢたかぬの水ぬ行ちゑ
えぶゑあろまぬ蔭合のゑ

(俳)うゑ〜ぬ〜ぬ白なる江鮒外去春

鯽　九万疋。鯽ゑ似く〜ちのさし
鮒ゑ似く大ゑ流の海ゑく

発句は俳諧作意の妙論とあるべく候
集めし句は句と数くの紀し付句の紙面
名人の句と加へ侍るべき外前句の心
句の字は法式など俳人伝ふるべ
数多紀を綴る紅梅白梅老梅八重
梅もあり梅の発句俳諧数百句と出
一古今名作の句

俳諧古今の名句と集め来り
注解をなす名句数百首と出す所の
画漢文面多くいろく出る

七夕天の川の由来と考へ記
加へ俳句の作りかた

文化三丙寅歳　発行

発句は俳諧の魂とあるべく候
集めし句は句と数くの紀し付句の紙面
名人の句と加へ侍るべき外前句の心
句の字は法式など俳人伝ふるべ
数多紀を綴る紅梅白梅老梅八重
梅もあり梅の発句俳諧数百句と出
一古今名作の句

俳諧古今の名句と集め来り
注解をなす名句数百首と出す所の
画漢文面多くいろく出る

七夕天の川の由来と考へ記
加へ俳句の作りかた